The Japan Lung Cancer Society

504 Ⅲ期腺癌の手術例の検討

京都大学胸部疾患研究所　胸部外科
○高橋　豊，小林　淳，神頭　徹，千原幸司，青木　稔，田村康一，和田洋巳，人見滋樹

目的：Ⅲ期腺癌の治療成績は悪く，特にN_2症例の成績は非常に悪い。当教室で行ったⅢ期腺癌の手術例に対する治療成績について検討し，手術の意義について述べる。
対象：1981年から1987年までに肺癌患者476例を経験し，このうち389例に手術を施行した。手術例の組織型は腺癌：165例，扁平上皮癌：142例，小細胞癌：38例，大細胞癌：27例，その他：17例であった。腺癌の病期はⅠ期：67例，Ⅱ期：19例，Ⅲ期：75例，Ⅳ期：31例，不明：3例で，Ⅲ期75例のうち64例に手術を行った。Ⅲ期腺癌手術例の内訳は，男子：39例，女子：25例，年令は平均60.6歳(35～81歳)であった。T因子ではT_1：7例，T_2：15例，T_3：42例で，N因子ではN_0：9例，N_1：4例，N_2：41例であり，T_3N_2は20例にみられた。また，何らかの合併切除を加えたものは23例であった。
成績：手術症例の予後は3生率：27.3%，5生率：23.4%であった。N_2(+)(−)別の予後は，N_2(−)で3生率：56.5%，5生率：56.5%，N_2(+)で3生率：13.6%，5生率：9.1%，N_2(−)は(+)に対して$P<0.05$で有意であった。
結語：Ⅲ期腺癌においてもN_2(−)例では十分な成績が得られたが，N_2(+)症例のそれは著しく悪く，手術の他，化学療法などの集学的治療の必要性があると思われた。

505 Ⅲ期肺腺癌に対する外科治療成績の検討

千葉大学医学部肺癌研究施設外科
○柴　光年、山口　豊、藤沢武彦、木村秀樹、由佐俊和
山川久美、田中由紀夫、小幡貞男、田宮敬久、岩井直路
深沢敏男、野本靖史、渋谷　潔、西岡恵美子

Ⅲ期肺腺癌の外科治療成績は、非小細胞肺癌の外科治療成績の中でも不良であり、手術適応についても問題が多い。今回は当施設において切除されたⅢ期肺腺癌症例の成績につき検討したので報告する。
対象は昭和62年12月までに当科に於いて切除され術後病理病期の確定した肺腺癌460例中Ⅲ期症例182例である。ⅢA期159例、ⅢB期23例とⅢA期例が87%を占め、5生率はⅢA期全体で18%、ⅢB期13%であつた。ⅢA期症例を相対的治癒切除(相治)群と非治癒切除(非治)群に分けて5生率をみると、相治群でT_1N_2 38%、T_2N_2 20%、T_3N_0,N_1 25%、T_3N_2 13%であつたが非治群では20%未満で、特にT_3症例で10%未満と不良であつた。補助療法についても検討したが、相治群で術後化療例59例の5生率は26%で、相治群無化療例28例の19%に比して良好であつた。ⅢB期症例ではN_3例は予後不良であつたがT_4例の左房、大静脈合併切除例や胸膜播種例の一部に長期生存例が認められた。
以上より、ⅢA期腺癌切除例では、相対的治癒切除例で、術後補助化療施行症例に比較的良好な5生率が得られる傾向が認められた。また、ⅢB期症例ではT_4症例で相対的治癒切除が可能な症例には長期生存も期待できるものと考えられた。

506 Ⅲ期腺癌切除例の臨床的検討

長崎大学第1外科
○川原克信、岡　忠之、辻　博治、原　信介
君野孝二、田川　泰、綾部公懿、富田正雄

目的：Ⅲ期腺癌切除例について臨床的に検討し、外科的治療の問題点について報告する。
対象症例：1982年より1987年までの5年間のⅢ期切除肺癌（非小細胞癌）211例中、腺癌93例について、扁平上皮癌98例、大細胞癌20例と臨床的に比較検討し、更に全切除例のうち、腺癌49例、扁平上皮癌14例、大細胞癌2例について、DNA ploidy patternを分析した。
結果：腺癌症例の男女比は2：1で、扁平上皮癌、大細胞癌に比し女性の比率が高かった。腺癌のT_3症例は39例41.9%で、扁平上皮癌、大細胞癌の各々65例66.3%、14例70.0%に比し少ないが、N_2症例は77例82.8%で、扁平上皮癌、大細胞癌の各々59例60.2%、14例70%に比し多かった。また治癒切除率は75%（絶対治切3.8%、相対治切71.3%）で、扁平上皮癌の65%、大細胞癌の60%に比し高いが、2年および5年累積生存率は、大細胞癌の各々6%より良いが、扁平上皮癌の各々27%、22%と有意の差はなかった。腺癌のT因子別2生率は、T_1、T_2 28%、T_3 17%、N因子別ではN_0 30%、N_1 53%、N_2 19%と、T_3、N_2症例の予後は極めて不良であった。DNA aneuploid typeは、大細胞癌では100%の症例にみられたが、腺癌では83.6%で、扁平上皮癌の81.2%と差はみられなかった。

507 Ⅲ期腺癌切除例の治療法に関する臨床的検討

大分県立病院胸部血管外科
○山口広之，内山貴堯，山岡憲夫，吾妻康次，赤間史隆

目的：Ⅲ期腺癌の手術成績はきわめて悪く，よりすぐれた治療法の登場が望まれている。当院におけるⅢ期腺癌切除例の予後について同時に行われた補助療法もふくめて検討し，その治療方針について言及した。
対象：昭和48年より昭和62年までに当院にて切除された肺癌331例のうちⅢ期腺癌は49例（Ⅲa期44例，Ⅲb期5例）であり，その予後をKaplan−Meire法により検討した。
結果：Ⅲ期腺癌手術症例の5生率は30.8%で，手術の根治度別にみてみると相対的治癒切除36例，絶対的非治癒切除13例でそれぞれの5生率は37.2%，15.4%であった。術後補助化学療法の施行された症例は41例であったが，昭和57年以前ではおもにMMC, 5−FU, Ara−Cの併用（以下MFC療法）が行われており，昭和58年以降はおもにMTX, ADR, CPMの併用（以下MAC療法）が行われていた。そこで両者間の3生率についてみてみると，MFC群(20例) 16.4%，MAC群(15例) 79.1%であり，さらに相対的治癒切除例にのみ限定して両者の3生率をみてみても，MFC群(12例) 19.0%，MAC群(15例) 79.1%と大きな差を認めた。また，MAC群において放射線治療を併用した8例の3生率は57.1%でその予後はむしろ低下していた。
以上の結果より，術後補助化学療法として行うMAC療法はⅢ期腺癌切除例の予後の向上に極めて有用と考えられた。

NII-Electronic Library Service